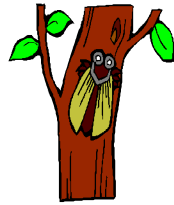


私の終戦



放送は敗戦を告ぐと知りし午後0

耳底に残る蝉しぐれまた

終戦五十周年を迎え、この時代を生きて来た誰しも感慨一しおのことと思つ。毎年八月ともなると戦争体験を語る番組や記録が放映されるが、テレビの前で涙するのは私たちの世代で、子供たちは見向きもしない。幸い私は血腥い戦禍に直接会わずに済んだが、実際遭遇された方々の思い出は、語り尽くせないものがあることだろう。伝承の難しさを感じるが、警鐘は鳴らし続ける義務のある世代でもあると思つ。

終戦当時、私は国民学校六年生だった。家は長野県の諏訪市にあったが、市役所と隣接していたため、七月の始めに強制疎開させられ、取り壊されてしまっていた。市役所から半径50メートルの周囲

が対象ということだった。終戦前一カ月のことである。

父は四年前から出征中であつた。叔母も六人の子供達と大連から引き上げて来て、隠居家に身を寄せていた上、東京にあつた家を貸していた二見陸軍中将一家もその隠居の二階に疎開して来ていたから、大変なことであつた。

真先に長女である私は、弟妹二人を連れ、とりあえず伊那にある祖母の妹の家に移ることになった。母は、それぞれの落ち着き先の手配をした後、女学校に通っていた従姉と二人で、後片付けをして、取り壊しに立ち会つた。その際もう一度測量をやりなおしてもらつて、円形から外れる土蔵と隠居家の半分を残すことが出来た。終戦後はそこで二年余りを過ごすことになる。

夏休みに入つて、母、従姉と共に川岸村（現在は岡谷市）の祖父の妹の家の隠居家に移つた。後に長野県の信連、共済連の副会長を長く務め、全農の中央会代議員となる山崎富春は、母の従兄に当たり、篤

「農家として地道な農作業に励んでいた。」

八月十五日は、当地ではお盆で、乏しい食料をやりくりしておはぎを作っていた。十二時には、天皇陛下の放送があるとのこと、一旦手を止めて、家族一同ラジオの前に正座した。しかし雑音が多く、抑揚のあるお声を聞いても誰も何も理解していなかった。

空になった肥桶を担いだ富春叔父が、縁側から声をかけた。

「日本が負けたちゅうぞ。そう言う放送だぞうだ」
ちやぶ台に丸く集まっておはぎを食べていた私達は一斉に箸をおいて、飛び出した。蒼白な顔をした母が、眼前の山なみを見つめながら私に言った。
「これからは奴隷になるかもしれない」

私もじんとなつて、山を見た。そのときの炒りつけるような蝉時雨が無意識のうちに脳裏に焼きついているのだ。

九月に入つて、どうしても前前の学校に戻りたいと、弟妹と一緒に駄々をこねて、上諏訪に戻つたのだ。

が、残つた隠居家は太工さんに貸してしまつてあり、彼らに移転先もないまま、私達が土蔵に住むことになったのだ。

それまでも乏しかった食料事情が、また一段と厳しくなつた。お弁当はおむすび一個、夜は汁ダブダブのスイトン。おやつの一握りの炒り豆も私が帰宅するころは、妹達のお腹に納まつていて、じつと空腹に耐えねばならなかつた。

いつの間にか虱がはびこつた。朝礼で前の子の髪に虱が出たり入つたりしている。私も後ろの人に、見つかつているだろうと思つと恥ずかしかつた。柘植の歯がびっしり詰まつた梳き櫛で、母に梳いてもらつと胡麻をまいたように虱がパラパラ落ちた。親指の爪でそれをピシピシ潰す。毛糸の下着を母は大きな鍋で煮たものだったが、すぐまた貰つてくるのであつた。進駐軍によつてDDTを粉を浴びたようにふりかけられて、やつと日本の虱は消えたのだ。

昭和二十年の冬は殊更寒かつた。女学校の口頭試

問で今年の最低気温はと聞かれて「氷点下十九度七分です」と答えたことを思い出す。ストーブの薪が不足していたのか、休み時間は屋外に出された。栄養状態が悪い子供達は、歯の根をガタガタ言わせて北風の中を日溜まりを求めて集まった。六年生のその時の私の体重は、二十六キロであった。

春になった。壊された母屋の周囲を板塀で囲んで、母は豌豆やトマト、じゃがいもなどを作った。母が馴れない肥桶を担いで、それがなかなかの出来で、通りがかりの人が塀の下から覗いたりした。

そして何よりも私たちの終戦は、父の復員であった。五月初旬のある日、学校から帰ると、土蔵の前に大きな軍靴があった。

記憶にある若い快活な父は消えて、色黒の眼光鋭く寡黙な男がそこにあった。当番兵が一切の身のまわりの世話をしていたのが習性となっていたのだらうか、私たちがぐずぐずしているとなすべくピントがとんだ。母の胸に寄り添うように過ごしてきた私たちのささやかな平安も吹き飛んだ思いだ

った。

父は、脚に貫通銃創を受け、背は迫撃砲の破片で抉られ、なおも戦場を離れることが出来ず、今またこの困難な時代に四人の子を育てる戦いが始まったのである。

仏教子者として将来を囑望され、豊饒が仕事場であったのに、実業に取り組んでの悪戦苦闘がこのあと二十年も続く。戦争で奪い奪われた命に対する鎮魂の祈りと後の世の平和を願っての活動を心の支えとして。

現在のこの物のあふれている時代の有り難さは、飢えと窮乏を体験した世代でないと実感出来ないかもしれない。しかし、世界を見渡せば、まだ戦争状態の所もあれば、飢餓に苦しんでいる人々、自由も平和もない人々が沢山いることを忘れてはいけなと思います。

時には、暫し手を休め、私達の子供や孫たちの未来のために、恒久平和をしみじみと祈念しようではありませんか。